

第十一章 人 物

一天坪地区

1 北村宗義

通称を龍五郎といい、文政十二年二月八日、香美郡片地村土族北宗宗吉の長男として生まれ、後に北村宗実の養子となり天坪の戸手野に移り住んだ。

剣術に優れ医学を学び、医業をもって地域に尽くすとともに、天保二年（一八三一）戸手野村に私塾を開き、近隣の子弟の教育に努めた。

教授内容は読書、習字とともに剣術を教授した。塾は慶応二年に廃止されたが、大豊地方で最も早く開かれた塾で、後年の大豊南部で活躍した人材は北村宗義の門を出た者が多く、墓に刻まれた教え子の氏名によると、藤川浜太郎、一条鑑明、寺尾丑太郎、岡田尚武ら二十六人に及んでいる。

2 永野昇鹿しょうろく

楠木村名本永野末次の長男として、天保三年十二月二十八日、久寿軒に生まれた。幼少のころから学業に励んだので、彼の書は一家をなすものとして近隣に知られた。人となりは温厚・篤実しかも気さくで、乞われれば気やすく揮毫びこうに応じた。

また相撲好きで、土地の神祭の宮相撲を見ては出場した若衆を自宅に連れ帰り、年齢の隔たりも忘れて若者と人生

を語り飲み明かせる人であった。

明治二十二年五月九日推されて天坪村村長に就任した。市町村制実施によって天坪村発足のときであり、初代村長としてその包容力で村をよくまとめ、村政の方向付けができた。同二十六年五月任期を終わり後進に道を譲った。

明治三十八年二月六日、六十四歳で没した。

3 岡田尚武

北村宗久の長男として嘉永三年（一八五〇）四月二十八日、角茂谷本村に生まれた。少年時代、北村宗義の門に学び、成長して同村岡田尚古の養子となった。

明治十九年七月一日戸長役場筆生となり、同二十年四月二十九日、久寿軒組合村村会議員に当選した。

明治二十二年五月九日、天坪村名誉助役に当選した。同三十年四月二十一日、長岡郡会議員に当選、参事会議員となって活躍した。

明治三十二年、天坪村長に就任したとき、天坪村には馬瀬小学校のほか角茂谷・河野川に分教場を置いていたが、岡田村長は三校の合併を企て、戸手野古味に新校舎を建築して教育の充実に尽くした。

明治三十三年二月五日現職村長として在任中に五十一歳で没した。

4 杉本太郎

杉本勇吾の長男として安政三年六月二日、久寿軒に生まれた。

明治二十二年永野村長に求められて天坪村収入役に就任した。同二十六年天坪村第二代村長に就任、その後同三十四年第六代村長、同四十年第十代村長、同四十四年第十一代村長、大正十四年第十五代村長に就任した。収入役を四

年、村長を五回にわたり十八年務め天坪村政の生き字引的存在であった。

きちようめんな性格で「今日の仕事は、今日すませる」が彼の信条であった。酒を愛し、声を掛けられると否とは
いわず、真っ先に会費を支払って参加する人であった。しかし切り上げどきも心得ていて、酒に飲まれない人であ
った。

昭和十三年六月二十日、天坪村馬瀬百九番地で七十三歳で没した。

5 佐藤精郎

明治五年六月二十日、佐藤鉄馬・須摩の長男として天坪村角茂谷百七十番地に生まれた。



平和橋記念碑

明治三十四年、二十九歳のときアメリカ合衆国に渡りサンフランシスコで農場を開拓した。仕事に一応目星がついた同三十八年十二月一度帰郷した。愛郷心が強く、後輩の教育に情熱を持った精郎は、多額の寄付をして教材を学校に贈った。

当時角茂谷と馬瀬間は渡し船で往来していたので、一度出水があれば二、三日は川止めとなり、村内の融和上、教育発展上大きな障害となっていた。彼は帰国に際してこの渡しに橋を架け村の発展に尽くしたいとの念願を

持ち設計書までも持参していた。この設計書と一千円の寄付金を添えて架橋の話を村民に申し入れた。

村民も佐藤精郎の愛郷心に感動し、両岸に築く橋台建設を奉仕で完成し同三十九年五月十二日落成式を行うことができた。橋は長さ二十四間余、幅七尺余県下で最初の鉄線釣り橋であった。

橋台近くに佐藤精郎の頌徳碑が建立されている。子孫は昭和三十五年十二月二十日、アメリカ合衆国の国籍を取得しサンフランシスコ市に繁盛している。
(第五章交通・通信、平和橋の項参照)

6 西岡茂義

西岡一郎・同久の長男として明治二十年三月六日、天坪村戸手野四十七番屋敷に生まれた。大正四年一月池田孫七村長に請われて天坪村助役に就任したのは二十九歳のときであった。以来同十四年十二月まで十一年間助役を務め村政に貢献した。

助役退任後は家業に専念していたが、太平洋戦争開始前の昭和十六年一月、村議会の全員一致の推薦を受けて天坪村長となった。村の財務体質の強化に努め、村財政の健全化を図るとともに、天坪村国民健康保険組合を創設し、村民の健康保持増進に努めた。当時県下に健康保険組合はほとんどなく、西岡村長の先見の明は驚くべきものがあつたが、時至らず昭和二十一年末をもって閉鎖した。

昭和二十一年三月村長を辞した後、自適の生活を送ったが、同五十七年六月二十一日、高知で没した。享年九十六歳であった。

7 池田孫七

安芸市赤野桜浜で池田久吾兵衛の二男として明治十一年二月十八日に生まれた。生家は備前の国岡山の池田輝政公

の末裔にあたり幕末のころは名字帯刀を許され「長木屋」という屋号で、一丁四方の屋敷に十棟を超える倉が建ち並び豪商であったという。

家を兄政司が継いだので孫七は、大杉の旧家で旅館を営む永野家「日和佐屋」に養子として入っていたが、同二十八年政司が日清戦役で戦死したので、永野家を出て池田家を継ぎ天坪村馬瀬に住んだ。

馬瀬では米穀商を営むかたわら教科書を取り次いだり、酒、煙草、塩等の専売品を販売していた。移り住んで五年目の同三十四年一月に収入役に選任され、また同四十四年一月には助役となり、約五年勤めて大正四年一月から天坪村村長となった。

村長の要職に在ること七年近く、至誠をもって多大の貢献をした。昭和になっても家業に励むかたわら村会議員などを務めていたが、昭和八年高知市に出て北新町で米穀商を営んでいた。

昭和二十二年高知市相生町で六十八歳の生涯を閉じ、天坪村馬瀬の旧役場上の墓所に永眠している。

兄政司は、天坪の忠霊塔に合祀されている。

8 小笠原高義

天坪村北川二十一番地、小笠原繁太郎・妻坂の長男として明治十七年一月十五日に生まれた。明治三十六年五月六日、同村北川三百十一番地、小笠原繁太郎・辻夫妻の四女春恵と結婚し同家の養子となった。

明治三十八年四月天坪村収入役となったが、同年六月退職した。大正二年に推されて村議会議員となってから昭和四年五月まで四期、十六年間村議会議員を務めた。途中大正四年十月からは長岡郡会議員に選出され一期四か年を務めた。

のち土陽新聞社に幹部社員として入社し活躍したが、戦時下の統制によって一県一日刊紙となったため、昭和十六



坂本重勅の頌徳碑

年「土陽新聞」は「高知新聞」と合併することとなり、「土陽新聞」の代表の一人として高知新聞社取締役就任した。

昭和三十七年十二月十七日故郷北川で没した。享年七十九歳。

9 坂本重勅

明治十七年一月二十六日、岡田尚武・茂美の二男として角茂谷に生まれ、繁藤坂本徳太郎の養子となり同四十一年八月二十一日草姓した。

明治三十三年四月天坪小学校に准訓導として奉職、その後、高知師範学校に入学、昭和三十八年三月高知師範学校を卒業するとともに天坪小学校訓導となった。翌三十九年天坪小学校校長となった。それ以後、昭和六年退職するまで

転校することなく、生涯を天坪の教育に捧げた。

在職中、各集落に報徳会を設立し、良風美俗の郷風を育て、早朝ラッパを吹いて早起きの習慣を育成したことなど有名で、今も語り継がれている。

昭和三十年十二月天坪小学校卒業生によって、坂本重勅先生頌徳碑が建立されたのを見ても、その教化が天坪地区に深く及んでいることが知られる。

同三十九年十一月一日、八十一歳をもって没した。

10 北村晴喜

明治二十八年四月十五日、西岡一郎・同久の四男として戸手野四十七番屋敷に生まれた。大正九年三月二十九日、天坪村角茂谷北村宗信・同人妻寅於の養子となった。

大正十四年十二月二十四日に天坪村助役に就任し四年間勤めたが、昭和五年一月十四日天坪村長に就任した。一期四か年精力的に治績を挙げ嶺北地方に北村晴喜の名を高めた。

第二期目の村長として在任中辞職して県議會議員に立候補し、昭和十年十月十九日当選した。同十一年九月県會議員を辞して、家業に専念していたが、同二十六年五月一日、三たび天坪村長に選任され、同三十年三月の大豊村新発足に大きく貢献した。

同二十四年から同二十七年まで、天坪村農業組合長にも推され、協同組合の基礎を確立するために手腕を発揮した。同三十五年十月二十八日、高知市で没した。享年六十六歳。

二 大杉地区

1 飯田実吾

飯田家の系譜は古く、年代不詳だが飯田刑部の墓もあり、文久・嘉永没年の墓碑が多く残されているし、明治になると士族飯田松右衛門実秀の名も見える。実吾は文政八年に生まれ、幕末のころ土佐藩に仕え川口送番所頭かしらを命ぜら

れたとある。

また川口新田神社の小宮、山祇神社やまぎの棟札に明治九年六月吉天、戸長飯田実吾、戸数六十軒、祠掌ししやう久保信馬とある。このことから川口村の戸長（村長）をしていたものと考えられる。

明治五年七月、それまで送り番所により営まれていた通信制度が明治新政府によって、新式の郵便制度としての郵便取扱所が、初めて川口に置かれた。その初代局長として実吾の長男格満が就任したが、格満は戸長や郡会議員に出たため途中二回局長を辞任した。

格満が辞任した明治九年九月から同十三年七月までと、同十七年十月から十九年三月までの二回通算六年にわたって、格満の代わりに父実吾が川口郵便局長を務めていた。

同三十年二月享年七十三歳にて没した。

2 飯田 格満

格満は、土佐藩に仕えて川口送番所頭であった、飯田実吾の長男として嘉永六年三月二十四日、川口四十五番屋敷に生まれ、幼名を実徳という。

母は同村同族の名主飯田辨作の三女トナ女である。幼くして書を本山高茂、土居宗弥に習い長じて本山文武館に出て文学を修めた。また民兵に召し出されて仏式兵術の練習を受けたが、明治元年の廃藩置県の改革により民兵が解散したので、川口で農業に従事した。

明治五年七月新式郵便制度により初めて川口郵便取扱所が設置されると、父実吾が送り番所の役人であった関係もあり、初代の郵便局長となった。同九年辞任して第五大区第四小区の戸長となり、十一年改称されて本山郷下分となっても十三年七月まで続けている。

明治十三年再び郵便局長となったが同十七年七月長岡郡会議員となり、十九年議員を辞任して三たび局長となった。川口郵便取扱所は県外との物資や郵便の重要な中継地点でもあり、高知街道の要衝として最も重要視されていた。その初代郵便局長として立川笹ヶ峰越えの難所を抱え^{ぶす}通送人夫を督励して新制度の定着と向上発展に寄与した。

大正元年十一月職を辞して局長を長男俊広に譲りすべての公職から隠退した。

昭和五年十一月享年七十八歳で没した。

3 飯田 俊広

父格満と潮江村の士族大楠寅太郎妹喜代との間に、明治二十一年十二月二十六日、川口で生まれた。明治三十六年東本山村杉高等小学校を卒業し、同三十八年高知県立農林学校に入校し、四十二年同校を卒業した。

明治四十二年四月大林区署の田野々小林区署に勤務していたが、同年十二月一年志願兵として輜重兵第十一大隊に入隊、同四十三年十二月陸軍輜重兵伍長として満期除隊した。除隊と同時に杉郵便局通信事務員を拝命していたが、大正元年十一月父格満の跡を継いで杉郵便局長に就任した。

常に進取の気象に富み、官吏にありながら殖産興業にも意を用い、大正九年東本山村に初めての乗合自動車会社として株式会社大杉組を設立した。発起人には飯田俊広・野島信豊・杉本茂幸らの名が見え、運転手は穴内の吉川善盛・平尾国登らであった。車両は米国のフォード社のものを使用した。

乗用車二台と貨物自動車一台を備え、高知と杉に分駐して一日二回往復して高知―大杉間の乗合自動車の便を図った。当時の車は根曳の坂でエンジンが焼け、蒸気を噴出しながら途中何回か休んでは上ったというが、交通機関が馬車か人力車であったのに比較すると、絶大な威力を発揮し、最高速の輸送機関として地域開発に寄与するものとして歓迎された。

昭和八年十二月長男正福に局長職を譲ると各種団体の役員を歴任した。局長在職中からも大杉青年団長や村会議員在郷軍人分会長などを務めていたが、退職後は、農業会役員、森林組合長、村会議員、長岡郡北部連合青年団長などを歴任、常に地域の指導的地位にあって社会に貢献した。

昭和三十三年十一月享年七十一歳で没した。

飯田家の一族は郵便業界に貢献することが大きく郵便制度が創設された明治五年からその局長を祖父実吾が通算六年間、父格満が三十四年間、俊広二十二年間、長男正福が四十六年間と父祖四代にわたって実に百八年間局長を務めている。このことは全国でも例を見ないことであるという。

4 森孝三郎

磯谷村の名本である森潔作の長男として、天保二年六月十五日（一八三一）に生まれた。嘉永元年（一八四八）十七歳のとき名本代理に任命された。

明治四年（一八七二）から同八年まで長岡郡第二十三区の副戸長兼村用係などを務め、その間戸籍（明治五年の壬申戸籍）の編製などを手がけた。

墓碑銘によると、徴兵令の施行に伴って、高知県の山間部に起きた「膏取り騒動」で人心が不穏になったとき、大義を説き、村民を鎮撫したとある。近郷の土佐郡森郷や本川郷などでも大騒動があって、当然大豊方面へも波及されたと思われるのに事なきを得ている。

明治十二年内務省山林局（現在の営林局）六等監守となり、同十九年には四国新道の開削委員として国道開設に尽力している。

晩年は公職を退き、明治三十六年八月、行年七十三歳で没した。

5 森 喬 木

前述の森孝三郎の長男として嘉永六年（一八五三）六月二日に磯谷で生まれた。幼名を嘉久馬といい、長じて加末と呼ばれた。また森下加末と称することもあった。

青年のころは相撲が群を抜いて強く、その名を近隣に響かせたという。また若いころから医学や漢学を修めていたが、慶応四年（一八六八）十五歳のときに名本代理を継いだ。

明治七年（一八七四）二十二歳のとき豊永郷下分（粟生村外十五か村）の戸長となった。

明治二十二年（一八八九）市町村制施行の大改革の際に職を退いた。以後は村会議員や郡会議員等に出席して地方自治に貢献するとともに、農業振興にも力を注いだ。特に植林、養蚕、製紙原料の増産を指導したり、また自らも努力した。その子に森末永・正永など三男一女がある。

大正十二年九月七日行年七十一歳で没した。

6 佐々木浜五郎

弘化四年（一八四七）十二月八日、東本山村（大豊町）穴内九十六番屋敷に、佐々木清次郎の三男として生まれた。た。

佐々木家は穴内の旧家で、安政四年（一八五七）の穴内村名本清次郎年譜指出扣さしだじひかえによると、清次郎は文政二年（一八一九）から第二代名本役に就任して、江戸末期まで名本職にあった。もっとも浜五郎の兄は竹作といい文政八年（一八二五）の生まれで、その墓碑には前村長と刻まれているから、清次郎の跡を竹作が継いだことになる。

竹作は明治十五年（一八八二）旧十一月十日、五十七歳で世を去り、その跡目を弟の浜五郎が継ぐことになった。



永野覚次の徳頌碑

竹作の妻は大坪玉といい、和田村大坪武八の妹であり大松充盛の叔母に当たる。町村制施行以後の東本山村の村政に、この両家が尽力することになった。

浜五郎は明治二十七年二月から同三十年七月まで東本山村名誉職助役、同三十三年から三十七年までと、同三十七年から四十一年までの前後合わせて八年間東本山村の村長を務めた。またこの間新しく発足した農業会長も兼務し、村政の発展に寄与した。

浜五郎の二男高晴も優れた人物で、明治四十四年から一か年間と昭和四年四月から同五年十二月まで、大杉村有給助役を務め、昭和五年十二月から同七年八月までは名誉職助役として、村政の発展に貢献した。

7 永野覚次

西豊永村永洲二十五番屋敷の北村浅之丞・妻種の二男として嘉永二年二月七日に生まれた。大杉村日浦永野作玄の長女登志と養子縁組を結び、養家の家業を継ぐために医術の修業をして医者となった。

医者になると郷里の日浦に帰り医業に励むかたわら、明治四十年四月から大正六年まで東本山村の村会議員や助役等を歴任した。その間議長の一環として、村を挙げて取り組んだ津家山の新田開墾事業には総監督として現場で指揮に当たった。

この工事は思いのほか難工事で当初の計画と違って、水路工事を含めて

四年近くかかり、請負業者が三回も代わるほどであった。工事期間中は家業も顧みず寝食を忘れて現場の監督に当たり、工事の完成に貢献した功績を認められ、国道側の日浦公民館横に彼の頌徳碑が建てられている。

覚次には男の子がなかったので二女の愛女に香美郡佐古村逆川の徳岡哲之助の二男秀吾を養子に迎え、家業である医者にさせた。

赤痢の特効薬の赤薬あかぐすりと火傷、腫物はれものに効く赤膏薬は、安くて良く効くので永野の赤薬・赤膏薬とともに、近郷近在に有名であった。

昭和六年五月三十一日、八十三歳にて没した。

8 田鍋常吾

嘉永二年十月七日、茂之七の二男として立川下名二十四番屋敷に生まれた。温厚誠実で、神職のかたわら、村会議員、区長などを歴任して郷土の信望も厚く、地区民から敬愛されていた。

当時の立川下名地区の交通が不便であることを憂え、大正二年井手川口から柳瀬に至る道路の開設を計画した。老軀を挺して、家計も豊かでない境遇のなかで、家人の反対を押し切って私財を投げだし、独力で精魂を傾けること七年、ついに四キリガ余の道路を完成させた。この道が今日の、県道川之江く大豊線の端緒となった。

近年、交通文化の恩恵は翁の素志によるものである。このような偉業を後世に伝えるため、井手川口に頌徳碑が地元民によって建立されている（第五章交通・通信、立川線参照）。

9 朝倉端一

山内家に仕える武士で維新後も山内家の執事を務めたという、吉村与右衛門の次男として嘉永三年十月十二日（一

八五〇）香美郡立田村に生まれた。幼少から利発で、向学の念が厚かったので致道館に学び、後に大豊村石堂の朝倉家の養嗣子となり朝倉家を継いだ。

明治元年戊辰の役が始まると弱冠十八歳で板垣退助の率いる迅衝隊じんしょうに所属して各地を転戦した。会津若松城の攻略にも参加したが無事凱旋して医者を開業した。

明治十二年杉村外八ヶ村組合村ムサの戸長に任命された。殖産興業に治績を上げ、特に植林を奨励し、また養蚕の振興にも力を注いだ。同十九年四国新道が敷設されるときは田辺県令に協力して、同志を募り寄付金を醸出きょうしゅつするなど、新道完成に尽力している。

のち一家を挙げて天坪村繁藤に移り、明治二十三年四月から医業の傍ら戸手野郵便局長に就任した。同四十四年五月従八位に叙せられ同月二十二日、行年六十二歳で病没した。

その子義路・孫斉・同智らは代々繁藤で医業に尽くした。



橋本幸彌君碑

10 橋本幸彌

嘉永四年（一八五二）三月二十五日、農業を営む橋本佐市の長男として杉二十三番屋敷で生まれた。明治二十三年一月から同二十七年一月まで名誉助役を、同年一月から同三十三年三月まで収入役を、同年同月から同三十六年三月まで有給助役として勤めている。

このように村政の要職を歴任して地域の発展に

貢献するとともに私財を投げうって、当時開通して間もない国道三十二号線の道路沿いや杉八坂神社の参道に沿って山桜を数百本植栽し観光開発の素地をつくった。

この功績をたたえて藤岡高知県知事の名によって大正十三年四月頌徳碑が杉参道登り口の北側に建てられている。
大正三年九月一日、六十四歳で没した。

11 橋本勝茂

明治八年十二月三日、橋本幸弥・妻袈裟の長男として杉二十三番屋敷に生まれた。東本山村役場に勤め収入役、助役を歴任したが、同四十一年九月に助役を退くと杉四十二番地で酒造業を始め銘酒「杉の泉」を造った。

進取の気性に富み、常に新しいものを吸収しようとしていたが、大正十二年一月嶺北地方で初めて自家用水力発電機を稼働させたことは特筆に値することである。

詳しい設計図は残されていないが、勝茂の長男明幸の日記によると、八坂神社から少し離れた旧大杉保育所のあった場所に百二、三十坪のため池をつくり、そこから百がくらの落差でペルトン水車により発電機を回したとある。

ため池の水量が少ないので昼は水をため、夜自家用の電気を三、四軒の貸家の人にも供給したが、朝までは水が保たなかったという。また昼はモートルをつけて酒造用の精米機も動かしたというが、わずか三年くらいで東豊永の発電所の電気が杉までくるようになって廃止した。

彼の長男明幸は教職についていたが三十代で夭折し、次男幸恵は長く役場に勤め、大杉村・大豊村を通して収入役を務めたので、親子三代にわたって同じ役職で貢献したことになる。

12 山下佐吉

陸軍大將山下奉文^{ともやま}の出身地については、父の佐吉が師範学校を卒業して小学校教師から再び医師を志し、その修業中に、本籍を香美郡山田町談議所の祖父の元に置き、母方の実家で生まれたので幾つかの異説がある。

大豊町に残されている山下佐吉の除籍簿によると、佐吉が師範学校を卒業し森村の小学校に勤め、その翌年天坪の角茂谷に勤務したとき、談議所の祖父嘉右衛門の籍を廃し天坪角茂谷に新戸籍を編製している。

明治十二年白川村の森田由宇と結婚し、相川小学校勤務のとき長男奉表^{ともとし}をもうけ、次男の奉文^{ともふみ}を妊^こった、同十八年に医学を志して長崎に遊学した。そのとき妻子を談議所の祖父嘉右衛門の元に預けたが、当時の本籍は住民登録的な意味もあり、原籍も戸主嘉右衛門の元に復籍した。由宇は白川村森田家に移り二男奉文を明治十八年十一月八日に産んだ。

明治二十年の秋医師の修業を終え川口村川口で開業し本籍を再び編製し家族とともに移り住んだ。時に兄奉表五歳、奉文二歳であった。

佐吉はその後大正四年八月妻由宇に先立たれたが、昭和四年二月行年七十五歳で死ぬまで四十二年間、本町川口で医者をしていた。また大杉村の村会議員を三期十二年間にわたって務めている。

佐吉は山下大將と切り離して考えても本町のような山間僻地で医療と村政に貢献した人である。次にその経歴を年譜にまとめた。

安政二年三月二日 大楠植村談議所にて紺屋の山下嘉右衛門の二男として生まれる。

明治十一年十一月 高知県立師範学校卒業。土佐郡森村小学校に勤務。

明治十二年四月 長岡郡天坪村角茂谷小学校に勤務。

明治十二年四月四日 晚霞村白川の土族森田由宇と結婚、戸主嘉右衛門の籍を廃し、角茂谷に新しく本籍を編製する。

明治十五年 土佐郡森村相川小学校に移る。長男奉表^{ともとし}生まれる。

明治十八年 医業に志し妻子を談議所の父の許に預け長崎に留学した。

明治十八年五月 本籍を再び父の籍に入れる。

明治十八年十一月八日 妻由宇は白川の実家森田家で二男奉文を産む。

明治二十年 高知市の小松医師について実地修業。この年の秋、医師の免許を受ける。再び新戸籍を長岡郡東本山村

川口三十四番地に編製し、同地にて開業する。

明治二十一年 長女照緒生まれる。

以下略……

昭和四年二月二十八日、七十五歳にて没す。

13 山下奉表

父山下佐吉が相川小学校に勤務していた明治十五年四月一日、その長男として生まれた。五歳のとき父佐吉が本町の川口に医者を開業したので、家族とともに移り住み幼時を本町で過ごし、川口小学校の前身である葛原小学校を卒業している。

奉表は海軍軍医少将まで昇進したが、弟の奉文大將と違って悲劇の將軍と謳われるような話題性が薄かったせい、本町民にとってなじみが薄い。しかし奉文大將が「自分も兄のように頭が良かったら医者になっていただろう」と嘆かしたほど奉表は頭脳明晰であった。

明治三十一年数え年十七歳のとき単身上阪し医師の元で書生となり苦学して、その年早くも医師の免許をとった。しかしそれにあきたらず、父の反対をおして上京し、済生学舎に学びながら内務省医師の後期試験にも合格した。だが数え年十八歳では年齢制限で開業もできず大阪で漁船の検疫医をしていた。

同三十七年一念発起して海軍軍医学校に入校し、卒業して軍医になると早々と折からの日露戦役に出征した。有名な広瀬武夫少佐指揮下の旅順港閉塞隊に加わり、功績を認められて金鵄勳章功五級を拝受し、果進して海軍軍医大尉となった。

明治四十三年六月十日、二十八歳のとき大阪市の中川頼次四女のくにと結婚して長男真一・二男昌夫・三男巖・四男九三夫の四人をもうけた。

奉表はその後舞鶴・横須賀・佐世保と任地を変わり、最後は海軍軍医少将となり、新婚時代を送った舞鶴要港海軍病院長を務めた。

昭和七年四月八日、呉市において五十一歳で没した。

14 山下奉文

奉文は父が医者、母の実家で生まれた子供である。

父佐吉が天坪村角茂谷で教師をしていたとき、「教師の代わりはいくらでもあるが、医者の代わりはないから医者になりたい」と長崎に遊学するとき本籍を談議所に戻し、奉文は母の実家、香美郡曉霞村白川の森田家で生まれた。

父が修業を終え医者となって本町川口で開業し、家族と移り住んだのは奉文が二歳のときであった。以後葛原小学校から川口小学校に移り、卒業するとこの地方に高等小学校がなかったため、母方の親戚に寄宿して荏生高等小学校へ通い、その後海南中学校に進学した。

この後の経歴については異論もないので年譜表にして掲げる。

明治十八年十一月八日 父山下佐吉・母由宇の二男として母の実家曉霞村白川の森田家にて生まれる。

明治二十年 父が東本山村（大杉村）川口にて医師を開業したので家族とともに移り住む。奉文ときに二歳。

明治二十五年四月 東本山村葛原字タンダにあった葛原小学校に入学。

明治三十年三月 この当時東本山村に高等小学校がなかったので、母方の叔父秋沢範由方に寄宿し韭生高等小学校に入学。

明治三十二年四月 海南中学校に入学。

明治三十三年九月 広島陸軍幼年学校に入校、次いで中央陸軍幼年学校に転校。

明治三十八年 陸軍士官学校卒業。

大正五年 陸軍大学校卒業。以後参謀本部、外国駐在武官、歩兵第三連隊長、陸軍省軍事課長などを歴任。

昭和九年 陸軍少将となり陸軍省にて軍政に関与する。

昭和十一年 朝鮮歩兵第四十旅団長。

昭和十二年十二月 陸軍中将となり北支方面軍参謀長。

昭和十四年 第四師団長。

昭和十五年 航空本部長、航空総監となり、軍事視察団長として独伊に出張。

昭和十六年七月 満州関東軍司令官。

昭和十六年十二月 太平洋戦争開戦となり第二十五方面軍司令官としてマレー・シンガポール作戦に当たり^{かくかく}赫々たる

戦果を挙げる。

昭和十七年 陸軍大将となり後に満州第一方面軍司令官となる。

昭和十九年 比島方面軍司令官として終戦を迎え、モンテンルバに囚^{とら}えられる。

昭和二十一年二月三日 戦犯としてマニラで刑死する。時に六十二歳。

山下大将は大正のころ参謀本部や陸軍省の中枢で活躍していたが、過激派の東条英機とそりが合わずにらまれて第

一線部隊に配属された。

マレー・シンガポール作戦では緻密な戦略の上に勇猛果敢に戦って、敵の戦線を疾風のように席捲したので「マレーの虎」と異名をとるほど世界中の人々から恐れられた。その反面部下には温情をもって接し、功は部下に譲り、責を一身に集める高潔な性格だったので悲劇の名將軍として惜しまれている。

シンガポール・セントーサ島の戦前フォード自動車工場であった場所に戦争資料館が建てられているが、その二つの部屋の一つは英軍降伏の場面と、一つは反対に日本軍の降伏の場面が本物そっくりの臘人形で再現されている。そ

の英軍降伏の場面の主役は山下中将とパーシバル中将であり、イエスかノーかと迫ったと伝えられる名場面である。

私生活の面では大正六年二月六日、佐賀県佐賀市赤松町一番地の永山元彦の長女ヒサと結婚したが、残念なことに後継者となる子供が生まれていない。大豊町川口には現在も山下將軍が幼年期を過ごした家が残されている。

15 大松充盛

安政六年（一八五九）一月一日、東本山村（大豊町）和田で、大坪武八の子として生まれ、明治二十三年十月二十二日、同村和田大松勝四郎の養子となった。

墓碑銘によると充盛の父大坪武八の祖父三谷兼助は庵谷の人で、その二男助四郎が和田の大坪弥三右衛門の養子となり武八が生まれた。庵谷



山下奉文大將、パーシバル中將と会見(シンガポール臘人形館)

三谷氏の先祖は、小松内大臣平重盛の孫三谷采女之助の遠裔という。

和田大坪家も郷土で、明治になって武八は総組頭を務め、地租改正では長岡郡北部の仕事に従事し、学務委員、村会議員なども歴任した。また明治四年廃寺となっていた豊楽寺再興に力を尽くした。

こうした環境に育った充盛は明治十二年官林六等監守に、同二十一年には杉村外八ヶ村の戸長に任ぜられた。明治二十二年市・町村制施行により東本山村が発足すると初代村長に就任した。

村長職は同二十二年五月から三十年七月病気のため辞任するまでの八年間と、更に明治三十七年四月から八月までの四か月間を勤めた。また同三十二年四月から翌三十三年三月までは名誉助役の職にもあった。

大松充盛の墓碑によると「村長の職にあること二十有余年」とあるから、町村制施行以前においても村長とか戸長とかの要職にあったのであろう。

更に墓碑では充盛の働きについて「生存中開発事業、薬師堂再建等多方面に尽力し、表彰等十四回を受け、長年の功績により村葬にさる」と述べて、その活躍ぶりが記されている。これらの功績により勲八等が贈られた。

昭和二年八月十六日、六十九歳で永眠した。

充盛の子居盛は、教育者として町内の各校に勤務し、校長となって敏腕を発揮した。

16 門脇恒実

長岡郡吉野村汗見の村山順斉の二男として、慶応元年十一月十日に生まれた。長じて本山の文武館に学び頭角を現していた。

明治十一年六月中村大王村の門脇文斉と養子縁組を結び同日相続をした。久寿軒に在った天坪村役場に勤めたが明治二十六年から三十年まで収入役、同三十四年から三十六年まで助役、同三十六年から三十七年まで村長などを若く

して歴任した。

明治三十七年の行政区画の変更によって恒実の出身地の中村大王が、天坪村から東本山村に編入されると、恒実も東本山村に勤務が変わり、翌三十八年から東本山村の収入役となり、四十一年八月には東本山村村長となった。時に四十三歳。

明治四十四年九月高知県議会議員に当選したため、いったん村長職を退いたが、大正二年二月から同八年十二月まで六年十か月にわたって再び村長を務めている。

恒実には常に殖産興業に意を用い、今という村おこし運動を、身をもって実践した人である。

村長職にあるころから村を挙げて諸施策を積極的に推進しているが、その中でも村直営で山野を開墾して二町三反六畝余の新田を開発している。このように村が直営で開墾を行うことは全国でも極めてまれであった。

そのほか山林を購入して村有林を造成したり、村営の家畜市場を経営し悪徳馬喰から農民の利殖を守った。また明治の終わりがちとしては珍しい納税組合を作り税金滞納を一掃して、納税の実を上げるなど、極めて積極的な政治を行った人である。

明治四十四年に大杉村信用組合が設立されていたが出資口数六十二口、加入人員五十数人と極めて不振であった。

このため当時県会議員をしていたが大正二年に再び村長になると、自ら組合の必要性を説き、各部族で説明会を開き、区長や村会議員に働きかけ協力を得た結果、参加人員九百人を超える新しい信用組合に生まれ変わったと『東本山村誌』に出ている。

大正八年十二月に村長を退職し高知商業銀行に勤め杉の出張所長となったが、その銀行が当時の金融恐慌の余波を受けて同十二年に倒産したので経済的に大きな打撃を受けた。

また大正の初めごろから地元の中村大王に受益者二十四、五人の耕地整理組合を作り恒実が組合長となった。これ

は中村大王の水の少ない字カキノ田へ池ノナルの谷から三百^リ余り導水して貯水池を造り、現在の田へ給水するとともに余水で新田も開発しようとするものだったが、当時の技術水準が低く、十年近くの歳月を費やして折角築いた堰堤や池が漏水して一万二千円余の借財が残された。

この借金は、大正十二年ごろ組合員の資力に依じて分担したが、その大部分を組合長が引き受けたために、恒実の晩年は不遇のうちに終わることになった。

彼は自分の欲得にとらわれず、身を犠牲にしても他人のため、社会のために貢献することを身をもって示した政治家であった。

昭和四年行年六十六歳で没した。

17 朝倉周威

明治二年五月二十日、大豊町和田二十四番地で朝倉周馬の長男として生まれた。

石堂の朝倉家は代々続いた素封家であり、その分家の長男として生まれた彼は、学問を修めるかたわら剣術や馬術などの武芸にも励んだ。

明治二十七、八年の日清戦争にも出征した周威は隊内で優秀な成績を挙げ、剣術では彼の右に出る者はいなかったという。

また輜重兵であった彼は、拔擢を受けて事務の仕事に専念し、馬の世話は免除されたという。

兵役から帰還して間もない明治三十年八月に東本山村の有給助役に任ぜられたが、弱冠二十八歳の助役であることを考えても彼が衆に優れていたことがうかがえる。

以来、明治四十四年九月までの十四年余りを有給助役から名誉助役と引き続いて村政の重要な役割を果たした。明



久保英氣の頌徳碑

治四十四年九月二十九日、東本山村村長に就任して、大正元年十二月二十八日までその職に在った。この間明治四十二年三月には東本山村農会の設立に参加し、副会長に就任して農業の発展に尽力した。更に東本山村村は調査副委員長となり、村農政の基本調査と今後の農政の方向の策定にも大きな力を発揮した。

大正八年三月三十一日、大杉村目付の区長となったが、以来断続的に区長や区長代理を務め、更に同十年五月から十一年七月までと、同十四年五月から昭和四年五月まで大杉村議会議員となって、地方自治の発展に貢献した。

昭和二十九年二月六日、本籍地で八十五年の生涯を閉じた。

18 久保英氣

明治五年六月十二日、和田村で田内安之助・妻春の二男として生まれ、同二十四年八月十二日、葛原千二百八十三

番地の久保竹太郎の養子となった。

若年のころから役場に勤め、同三十六年五月から二年間収入役を務めた。大正二年三月から同九年一月まで大杉村名誉助役となり、同九年一月から同十一年十二月までと、同十四年三月から昭和四年三月までの二回、通算六年近く大杉村長となった。

また昭和八年から同十一年まで大杉村会議員を務めるなど公職に二十有余年間在職した。

村長在職中は村内全般の事業に積極的に取り組み

み、学校は村内四校全部の校舎を改築した。また県道吉野―大田口線の建設や大杉橋の架設などの工事に尽力した。そのほか将来教育費が増大することを見越して財政の確立は村有林の増設にありとして、門脇村長の跡を継ぎ村有林を増設した。

昭和十年ごろから外地に移住して開拓を提唱していたが、率先垂範自らも台湾に渡り外地に骨を埋めた。

昭和十二年七月九日、台中州台中市旭町一丁目五番地で行年六十六歳で没した。

大杉村では昭和二十七年、その遺徳を顕彰するため頌徳碑を建てたが、大杉中学校が中村大王に移転したのでその碑も移し学校の玄関前を飾っている。



杉本幸芳

19 杉本幸芳

「延喜十二壬申年京師の太郎義家なる者、自ら信ずる神像三体を大杉の元に祀りて氏神となし爾来杉本姓を名告り当地に住む」と古文書にある。幸芳はその杉本家の末流で代々名本の家を継ぎ、父茂芳・母高の長男として杉六番屋敷で明治十年十一月十九日に生まれた。

父の茂芳が杉村外八ヶ村の戸長をしているとき三十五歳で早逝したので、幸芳は苦学して師範学校を卒業した。しばらく教職にあったが二十歳のとき、一念発起して上京し、早稲田専門学校（明治三十五年大学と改称）法学部に入學し明治三十五年卒業した。同年ただちに判検事司法試験に合格し、横浜地方裁

判所司法官職に就いた。

しかし惜しいことに苦学のときの無理がたたって病氣となって、郷里に帰り一時療養していたが、小康を得ると高知市に出て弁護士事務所を開き公私事に活躍していたが、大正元年八月六日、享年三十六歳で病没した。

幸芳の墓は戸長役場の跡といわれる場所から五、六十歩離れた杉小学校の石垣の下に杉本家の墓所にあり、その墓碑銘に以上のようなことが記されている。幸芳の子供も夭折し、弟の正芳は早くから中村大王の石原家に養子として出ていたので杉本家の跡は絶えている。

20 崎田久森

明治十九年十二月二十七日に日浦十一番屋敷で崎田徳太郎・妻注連の長男として生まれた。大正十年五月から同十一年七月までと、昭和四年から同十一年四月まで三期、通算九年余り大杉村の村会議員を務めた。

昭和五年十二月から同十一年四月までの六年近く大杉村長を務め、昭和十一年四月長岡郡の県会議員の補欠選挙に当選し、同十四年にも再選を果たし、通算七年半県会議員を務めた。

村長当時から産業開発に力を尽くしていたが、『立川遺聞録』にも採録されているように立川県道の開設については多大の貢献をしている。立川県道の開設に当たり、川口―瀬間の開削工事に県が財政困難を理由に中止しようとしたときに、崎田村長の英断により、村債を起こして同区間の工事を完了したため、その後の工事も円滑に進行したとある。

彼は高知市廿代町十四番地（高知橋南詰め西側へ二軒目）で妻の経営していた㊦旅館で晩年を送っていたが、昭和十九年十月二十七日五十九歳で没した。

21 野島 信豊

香美郡土佐山田町明改の野島鉄三郎が明治二十年ごろ東本山村杉に来て酒屋及び旅館業を開業した。明治二十八年二月五日その鉄三郎と妻田鶴の間に長男信豊が杉七百六十七番地で生まれた。

信豊は同四十一年三月杉尋常高等小学校高等科三年を修了、大正四年野砲第十一聯隊に入隊し同十一年砲兵伍長となった。

昭和二年十月大杉消防組頭となり、同四年大杉村会議員に当選し、同十二年まで続いた。

昭和十二年三月大杉村長に当選し、同十三年農業委員会委員長等を兼務した。同三十年には大豊村合併の第一回議会議員に当選し、初代の議長に選ばれた。戦前・戦後を通じて村政に参画して地方自治に尽くした人である。

同三十七年十二月行年六十八歳で没した。

村長時代の前後を通して大杉の八坂神社に参詣した有名人の揮毫帖は額未亡人が保管しているが、町の指定文化財級のものがたくさんある。

22 小笠原清浩

明治三十一年七月四日、清浩は小川百四十二番地で西山伊三郎・妻辻の二男として生まれた。前名を茂松といい大正十年清浩と改名し、その翌年の十一年に天坪村北川二百二十六番地の戸主小笠原延栄に入夫婚姻をした。

結婚してから一念発起、上京して明治大学専門部を卒業し大阪府の警察官を務めていたが昭和七年前郷里に帰り小川字野窪に住んだ。

昭和十七年に大杉村の議会議員に当選すると昭和三十年大豊村合併までの三期、十二年間務めた。その間昭和二十



小笠原清浩頌徳碑

二年には大杉村議会議長となった。

合併後第一回目の議会議員選挙にも当選し二か月後の三十年六月第二代の副議長となり、続いて同三十二年五月から第三代大豊村議会議長となった。以来四十二年まで三期の間議会活動を続け、その他にも農地委員会委員長などの要職も歴任した。

彼は将来を見通し、大杉中学校の移転問題にからめて、農村広場的な総合グラウンドの大構想を描いて広く校下民に提唱し、特に用地のあっせんには功があったが、残念ながら実現を見ることもなく逝った。時に昭和四十三年十月一日、行年七十一歳であった。

中村大王中州の総合グラウンドの東北隅に頌徳碑が建てられている。

23 秋山重実

明治三十三年九月三十日、東本山村（大豊町）穴内百番屋敷で、秋山茂晴の長男として生まれた。この地の小字をコヂヤシキというが、コヂヤシキは古屋敷であって、この辺りでは旧家であるという。

大正九年朝倉四十四連隊に現役入隊し、その間シベリア出兵にも参加した。大正十三年九月志を立てて大阪府に巡査として勤務、昭和八年九月帰省するまでの九年間勤務に精励し、巡査部長に昇進した。

昭和十二年五月二十日、推されて大杉村議会議員に当選し、同十七年六月七日までその職にあったが、この間大杉村警防団副団長などの要職に任ぜられ、また大杉村信用組合の役員なども兼務した。

昭和二十四年一月二十七日、大杉村村長に当選、同三十年三月三十日、町村合併により大豊町が発足するまでの約六年間、職務を遂行した。

温厚篤実で、考え方や行動は地味だが、その生活態度や経済運営は多くの人々の支持を得た。役場に登庁しても県庁に行っても常に地下足袋を履いていたことから地下足袋村長の異名をとったし、自宅から国道までの往復には常にオイコを背にして、帰宅時には肥料その他の必要品を背負って帰っていた。

昭和二十四年一月農業共済組合の発足と同時に理事長となった。同三十年農業共済組合が合併すると再び同五十二年までの長期にわたって勤務した。しかも昭和四十年六月一日からは組合長の要職にあった。

また一方では地方裁判所調停委員として重要な役目を果たし、昭和五十一年三月二十五日には、永年勤続の表彰を受けた。晩年は農業に従事したが、期するところがあってキリスト教に入信した。

昭和五十七年十一月一日、高知市で永眠した。八十二歳であった。

24 鈴木友茂

明治三十三年十一月二十四日、鈴木常五郎・妻芳衛の長男として立川下名二十八番イ号地の立川番所書院で生まれた。大正四年川之江高等小学校を卒業。昭和三年高知県の県有林並びに立川県行造林の看守に任命された。

昭和十三年大杉村議会議員に当選。同二十一年三月大杉村長に当選したが、戦時中翼賛壮年団長を務めていたため公職追放令に該当し追放された。同二十七年追放令が解除されると、ただちに教育委員に委嘱された。

昭和三十年大豊村議会議員となり、同三十四年再選されると第四代大豊村議会議長となった。その後議員を続けていたが、昭和四十二年再び議会議長になるなど議会活動を通算二十一年間務めた。

昭和三十一年立川農業協同組合長、同三十七年からは立川森林組合長等を歴任した。

昭和四十九年地域の向上発展に貢献し地方自治に尽した功績を認められて、勲五等に叙され双光旭日章を授与された。

昭和五十一年五月十九日、行年七十七歳で没したとき、正六位を追贈された。

昭和四十九年国の重要文化財の指定を受けた旧立川番所書院は、友茂から町が譲り受けたものである。

三 西豊永地区

1 門田久太郎



門田久太郎の墓

門田久右衛門の長男として大砂子で生まれた。

明治元年の戊辰の役に当たり板垣退助の率いる
迅衝隊士として会津戦争に参加し、同年九月二十
一日（旧暦）会津若松城を攻略中に行年二十四歳
で病死した。

墓は会津若松市の融通寺内西軍墓地及び大砂子
に在る。大砂子の墓碑には次のように刻まれてい
る。

土州軍門田久太郎墓

慶応四年九月廿一日、二十四歳

門田一族の祖霊社亀神社に若宮八幡として祭られている。

2 桑名定慶

天保二年十二月二十五日、大久保口番人庄屋、桑名弥八郎の長男として生まれた。幼名を武三郎という。弘化元年父の死亡に伴い十四歳で父の跡目相続を認められた。

万延元年十二月郡奉行から呼び出しを受け、役目精勤（関所番人役十七年勤続）の理由から褒物米六斗を拝領したと記録されている。

また慶応元年二月、明治二年十二月、同四年四月の三回にわたり、郡方役所に出向き寸志銀を献上した。この行為は奇特であるとの理由から酒、吸物^{すいもの}を頂戴したとも記されている。

明治六年大久保村外三ヶ村（大砂子・永渕・柳野）の用係となり、同八年十一月三十日第五大区第三小区の戸長となり、学校周旋係兼務を命ぜられて村政、教育に尽くした。大正九年十月六日九十歳で没した。

3 桑名定親

天保十三年二月一日、大久保桑名弥八郎の五男として生まれた。幼名を和吉と称し後に定親と改名し、実兄桑名定慶の養子となった。

明治三年正月民兵制度の第九等官、第四大隊第九小隊の嚮導^{きょうどう}を仰せつけられ、月俸米三斗を支給せられたとの記録がある。

明治十二年三月に長岡郡大平村外十五ヶ村組合村（豊永郷上分）の用係（助役）となった。同十四年十一月、長岡

郡柚ノ木村外十五ヶ村組合村（大平村外十五ヶ村組合村と同じ）連合村会議員に当選し再選を重ねた。

明治二十二年四月、市町村制施行に伴い西豊永村会議員に当選し、全年五月西豊永村名譽助役となった。同二十四年西豊永村長に当選し、三か年間地方自治に尽くした。

明治三十五年七月二日行年六十一歳で没した。

長男桑名久寿治も西豊永村長を勤めた。

4 曾田時中

弘化四年九月、土佐郡小高坂村沖真吉の長男として生まれた。曾田方仙の養子となり大田口に居住した。明治十二年から同十六年にかけて、二度にわたり粟生村外十五ヶ村組合村（豊永郷下分）の戸長を務めた。

明治十七年粟生郵便局（上東）長に就任し、その後明治三十六年まで約二十年間、黒石、豊永郵便局長を歴任して地方の郵政事業に寄与していたが、同年八月二十八日現職のまま病没した。行年五十七歳であった。

5 都築利吉

嘉永元年十月二十八日大豊町安野々都築和右衛門の長男として生まれた。和右衛門は石堂の朝倉家に生まれ、都築家の養子となったもので、名本代理をつとめていた。

利吉は十七歳から戸長役場に勤め、明治十八年には豊永郷上分（大平村外十五ヶ村）の戸長となっていた。その後西豊永村名譽助役や村会議員を経て同三十五年には村長に就任した。この間四十年にわたって村政に携わり業績を残した。

上東に所在していた西豊永村役場が焼失した時の助役であり、新庁舎を移転新築した当時の村長であった。日露戦

争の功により勲八等白色桐葉章を受けた。

昭和十年十二月五日、八十六歳で没した。

養子都築栄も西豊永村長を務めた。

6 秋山鹿連

嘉永三年二月二十二日、大豊町梶ヶ内の医師秋山玄角の長男として生まれ、医業を継いだ。明治二十三年ごろ西豊永村長に就任したとあるが、時期や期間は明らかでない。

殖産興業特に製茶と養蚕の振興に努めた。明治三十年には自ら製茶工場を建設して、ウーロン茶の製造を行うとともに、同茶の伝習所を開設して、山間農業の育成に尽くした。また、宇田友四郎らとともに横浜の貿易商を通じて外国貿易も行った。

明治三十五年単身で朝鮮に渡り医院を開業して盛況を伝えられていたが、同三十七年八月六日、現地で没した。行年五十五歳。

7 山中化育

安政二年五月六日、大豊町立川山中銀六郎の四男として生まれ実兄茂義（明治八年当時豊永郷上分十六か村の初代戸長）の養子となり別名を勝之助といった。明治・大正にわたり西豊永村長に三度選ばれて産業・教育等地方の開発に治績を上げた。

明治十六年黒石に店舗を開き、後の山中百貨店の基礎を築いた。同三十六年九月から同三十八年六月まで豊永郵便局長を務めた。また、同四十三年の大田山薬師堂の大修理には、その修理委員として尽力した。

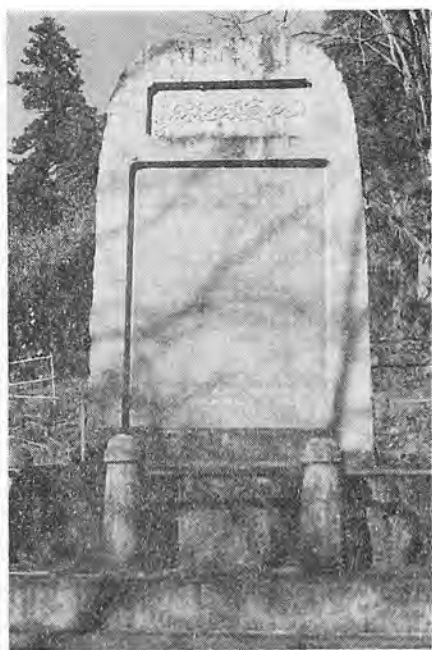
員勤続二十年に及んだ。明治三十八年西豊永村長に当選したが、これを固辞して受けなかった。清廉の人として知られている。

明治四十一年及び大正五年に長岡郡会議員の補欠選挙で当選した。また、西豊永村有林打置山（西峰）の造林育成に貢献した。この村有林が戦後の教育改革による学校建築の大きな財源となった。

彼は、浜口雄幸と親交があったものとみえて、浜口が昭和五年十一月東京駅頭で狙撃されたとき北村は早期の平癒祈願を行い、その神符を浜口に送った。これに対する礼状が柳野北村幸彦方に残されている。

9 中西茂樹

明治七年十二月二十七日、大砂子中西覚次郎の長男に生まれた。明治十八年大砂子小学校卒業後、同村中西重義に



山中毒育の頌徳碑

昭和八年十二月二十九日、七十九歳で没した。本町寺内の国道三十二号線上方に頌徳碑が建立されている。これは西豊永村と地元住民の発起によるもので、題字は浜口雄幸の書である。

養子利信も昭和四年西豊永村長に就任して村政に貢献した。

8 北村治三男

安政四年大豊町桃原上村広平の三男として生まれた。柳野北村新吾の養子となり、西豊永村会議

師事して漢学を修め、そのかたわら徳島県池田村大浦和平について剣道を修業した。

明治二十八年西豊永村書記となった。同三十年十二月辞して高知県巡査となったが同三十一年五月病氣のため退職して、再び西豊永村書記に任用された。同三十四年八月台湾総督府警察官として台湾に渡り、同年台湾平定作戦に参加した。

台湾から帰国後明治三十八年西豊永村名誉助役に就任したが、在任八か月で香川県巡査となった。大正八年長岡郡会議員に当選し、後年副議長に選任されて郡制廃止まで在任した。

昭和十四年十二月三十一日、五十六歳で没した。

彼が台湾平定軍に参加したときの武勇伝を、台湾から家郷へ手紙の形で報告したものが大砂子中西力方に保存されている。

10 石川 政市

明治九年三月八日愛媛県上山村に生まれた。長じて大田口に來住し酒造業、米穀商、旅館などを手広く経営した。酒は「太陽」の銘柄を用い地酒として一般に親しまれた。

明治から昭和にかけて盛んであった頼母子講の米の価格は、石川商店の取引価格でぜい銭に換算されたとの記録が残されている。

西豊永村村会議員、土地賃貸価格調査員（大阪税務署監督官）、統計調査員その他村治の要職にも携わり、大正六年には長岡郡会議員に当選した。

昭和九年には西豊永村寺内ノ船戸線開設工事費として金百円を寄付した。この理由によって当時の高知県知事小林光政から表彰を受けた。



石川政市の頌徳碑

また、昭和十六年に広瀬山の開発を計画して、岩原駅より延長十^{キロ}の林道を開設し、私財を投じて完成した。この道路は現在も地域住民の重要な生活道として活用されている。

昭和二十八年二月二十六日、七十七歳で没した。三谷部落の入り口に、頌徳碑が建立されている。

11 桑名久寿治

明治十年二月十日、大久保桑名定親の長男として生まれた。同二十三年七月西豊永村大砂子簡易小学校を卒業、同二十八年三月高知県土佐郡第一高等小学校卒業、同年四月高知中学校五級に入学、同三十一年四月同校二級を修業した。

同年高知県尋常師範学校講習科に入学して県内教員免許を取得した。その後寺内、岩原小学校に教員として奉職していたが、明治三十四年西豊永村書記となり同三十五年には学務委員となった。

明治三十六年及び同四十年には、長岡郡会議員に当選した。この間西豊永村会議員として籍を置き地方政治に携わった。

大正十四年以来名誉助役を務めていたが、昭和七年四月西豊永村長に当選し村治に尽くした。昭和十五年西豊永村方面委員（民生委員の前身）となり終戦まで在任した。

昭和二十二年九月十四日、七十一歳で没した。



桑名久寿治の顕彰碑

桑名家は定慶・定親・久寿治と三代にわたって戸長や村長を務め村政に貢献した。大久保の神社境内に桑名久寿治の顕徳碑が部落民によって建立されている。

12 長野楠太郎

明治十年六月五日大豊町永渕、長野重信の長男として生まれた。三高医学部を卒業して明治三十三年医師試験に合格した。

大正九年大田口に移り長野医院を開業して地方医療に尽力した。自家用のサイドカーを運転して気軽に往診するなど地域の信望が厚かった。

一方西豊永村会議員、同村名誉助役、長岡郡会議員なども務めて地方自治行政にも貢献した。

永渕の神社境内に同部落へ金壹千円を寄付（昭和十年ごろ）したとして顕徳碑が建てられている。

後年愛媛県川之江に転住し医業を続けていたが、昭和十九年五月二十七日、六十六歳で没した。

養子、長野子（石堂朝倉家出身）も一時大田口で医院を開いていた。

13 都築兵左

大豊町中屋都築良吉の長男として、明治十七年十月五日に生まれた。現役兵として服役後、明治四十三年五月に西豊永村収入役に選任された。

その後、名誉助役などを経て、大正三年から昭和四年にかけて通算約十一年の長期にわたって村長の職にあった。また、村会議員に籍を置くこと十八か年にも及んで、村の政治、産業に大きな足跡を残した。

大正七年西豊永村信用販売購買組合の創立に参画して、以来理事や組合長の要職を歴任した。昭和十九年に産業組合が農業会に改組されるとともに、農業会長に就任して同会の解散まで在任した。

また、昭和三年には、高知県繭糸販売購買組合連合会の創立に参加し、同九年からは連合会長として養蚕農家の育成のために敏腕をふるった。この当時の同連合会は、巨額の負債を生じ経営の危機に陥っていたが、彼の努力により更生することに成功した。この功績によって昭和十七年に時の高知県知事沖野悟から特別表彰を受けた。

彼はまた、蚕糸業界に特に貢献したとの理由で、昭和十六年には大日本蚕糸会総裁載仁親王からも表彰された。その他西豊永村農地委員、農業調整委員、食糧調整委員、地方農地委員などを歴任して常に指導性を発揮した。

昭和二十六年二月四日、六十八歳で没した。



上村萬清の頌徳碑

長男良宏は、西豊永村長や高知県議会議員を務めた。

14 上村萬清

明治十七年七月五日、連火オカタ上村茂五郎の長男として生まれた。性穩健にして責任感強く、近隣の信望も厚く西豊永村会議員などにも推された。

昭和十八年連火部落大火のとき、同部落の氏神

である聖神社にも延焼した。彼は自宅の炎上中をも顧みず神社のご神体等を無事持ち出して焼失を免れた。この美舉に感激した部落民一同は、後年彼の頌徳碑を神社の境内に建立した。

15 山中利信

明治二十四年一月五日、奈良県吉野郡賀名生村上辻信吉の二男に生まれた。長じて奈良県事務雇の古社寺係となった。

明治四十二年西豊永村豊楽寺薬師堂修理工事のため、高知県特別保護建造物薬師堂修理雇として高知県に出向を命ぜられ、同工事の完成に努めた。薬師堂修理完了後再び奈良県庁に帰属していたが、大正二年寺内山中化育の養子となり、山中百貨店を経営した。

昭和四年七月から同七年三月まで西豊永村長として村政を担当した。村長辞任後も村会議員、学務委員、衛生委員、森林組合長、その他各種の公務を歴任した。

また、同十五年西豊永方面委員を委嘱されて以来、引き続いて民生・児童委員として昭和四十六年十一月三十日まで社会福祉向上のため尽力した。

この間長期にわたり、大豊町並びに土佐・長岡郡の社会福祉協議会長に在任した。これらの功績により厚生大臣はかから各種の表彰を受けている。

昭和三十九年には民生委員としての善行を表彰されて藍綬褒章を授与された。更に同四十年八月には勲五等に叙せられ瑞宝章を下賜された。

昭和五十四年十一月二十一日、八十九歳で没した。

16 都 築 栄

明治二十四年二月二十五日、大豊町安野々都築嘉治馬の三男として生まれた。長じて、安野々都築利吉の養子となった。

明治四十四年高知県立師範学校二部を卒業して、桃原尋常高等小学校、庵谷・寺内各小学校に奉職した。昭和六年四月には西豊永尋常高等小学校長に就任し地方の子弟教育に努めた。

昭和十年西豊永村長に推されて、一期四年間行政を担当した。村政を離れてのち一時高知相互銀行に勤めていたが、香美郡山田町に請われて、昭和二十八年四月から同二十九年八月まで同町教育長と公民館長に就任した。

昭和四十五年二月十八日八十歳で没した。

17 三 谷 丑 郎

明治二十五年四月一日、大豊町黒石（東寺内）三谷高良の長男として生まれた。大正二年に京都法制大学を病氣のため中退して、同三年に高知県立師範学校を卒業した。

長岡郡五台山、土佐郡潮江小学校の訓導を経て、大正七年に西豊永尋常高等小学校の訓導となった。

大正九年に豊永郵便局長に就任し、昭和三十五年五月まで三十六年間にわたって地方郵政事業の発展に寄与した。

また西豊永信用販売購買組合の理事、小作調停委員、農地委員、森林組合長、民生委員長などを歴任した。

更に西豊永村教育会の常任幹事、社会教育委員、寺内・大田口小学校の後援会長など村教育の発展に努め、高潔な人格者として村内外に信望が厚かった。

昭和十年に勲八等、同十六年に勲七等、同十七年には正七位に叙せられた。



大利国太郎顕彰碑

昭和三十九年七月二十九日、八十一歳で病没した。

18 大利国太郎

明治二十七年九月十二日、黒石の大利喜久馬の長男として生まれた。若くして青雲の壮志を抱き、ブラジルに渡航して、荒地を開き艱難辛苦の結果、現地に農場を経営して事業を大成した。

昭和二十八年大田口小学校が校舎を移転改築するときに多額の浄財を寄付した。西豊永村は彼を善行を長く伝えるため、同校校庭に、西村自登撰、県知事川村和歌治書による顕彰碑を建てている。

昭和五十四年八月二十一日ブラジルのサンパウロ市で八十一歳で没した。

19 豊永雄喜

明治二十八年八月十七日、川戸豊永英則の長男として生まれた。大正四年高知師範学校を卒業し、高知市江ノ口小学校を振り出しに教職に就いた。

大正七年から郷土の学校に奉職し、同十二年には西豊永尋常高等小学校校長兼実業補修学校長となった。

彼の一貫した教育理念は「小学校で教育の実績を上げても、青年団や実業補修学校が充実していなければ、教育の目的は達せられない」として青年教育に努めた。

昭和五年西豊永村は補修教育を義務制とした。これは文部省に先立つこと九年前であった。また西豊永村青年団は、大正十二年に内務・文部両大臣から、更に昭和五年には文部大臣の表彰を受けた。これらのことは、豊永雄喜らの情熱をこめた青年教育が実を結んだものといわれる。

昭和七年高知県社会教育課に入り、社会教育主事として全県的な視野に立って、青年指導者の養成に努めた。昭和十八年には大篠村小学校校長兼青年学校長となり青年教育の振興に尽力するなど人生の大半を青年教育に傾けた。

戦後、同二十三年高知相互銀行に入社し、初代豊永支店長として業績を上げていたが、昭和三十二年八月七日、六十三歳で病没した。

20 小嶋清利

明治二十八年十二月八日、高岡郡窪川町興津に生まれた。大正十年大田口に転住し木材、木炭業などを営んだ。

大正十二年車両一台をもって貨物運送業を開始した。その後車両数も増加していたが戦事統制令により、東西豊永村の運送業者が合同して報国合同運送有限会社を設立し社長に就任した。昭和二十年には高知県合同運送株式会社に統合されたが、同三十年十一月に大豊運送有限会社を設立して代表者となった。現在の保有車両は三十一台を数えている。この間の業界に寄与した功績が大きいとして、昭和四十六年運輸大臣表彰を受けた。

大正十二年四月、大田口私設消防組の組頭就任以来、公設大田口消防組、西豊永村警防団長、同消防団長などこの道四十一年余に及び、昭和三十年消防庁長官賞を授与された。

このほか西豊永村会議員、同名誉助役、大豊町教育委員などを歴任するほか、昭和二十四年から同四十八年まで地方家庭裁判所調定委員も務めた。

これら各種の業績により、同四十一年に藍綬褒章を受け、同五十二年には勲五等に叙せられ双光旭日章を授与され

た。

昭和五十九年八月二十日、行年九十歳で没した。

21 三谷義里

明治三十四年四月一日、三谷高吉・熊女の長男として西豊永村庵谷百十五番地に生まれた。西豊永尋常高等小学校卒業後、剣道修業を志し、山内豊健・中山博道・植田平太郎・甲田盛夫ら著名な剣士に師事して研さんをつんだ。

大正十年現役兵として野砲第十一連隊に入隊し、昭和四年台湾駐屯軍代表として剣道の天覧試合に出場し、団体優勝を果たし、個人戦で第二位に入賞した。

昭和七年から香川県尽誠中学校、朝鮮黄海道信川農学校、同慶尚北道大邱中学校に剣道教師として奉職した。

昭和十二年中国戦線に出征、劉河鎮攻撃の功により部隊長賞詞を受け、同十五年四月二十九日、勲六等単光旭日章功六級金鷄勲章を授与された。

昭和十年五月剣道練士の称号を授けられ、同十五年五月居合道練士の称号を受け、同五十八年剣道九段範士、居合道範士九段となった。高知県剣道連盟役員、全日本剣道連盟役員を歴任し、昭和五十八年全日本剣道連盟本部審査員、全日本剣道連盟居合道委員、都道府県居合道大会審判委員などを務めるかたわら、土佐山田町に無想直伝英信流道場「養心館」を開き、館主として県下の後輩を指導した。著書に『居合道教範』がある。

昭和六十一年五月十八日没した。享年八十四歳。

22 釣井朋水

明治四十一年一月二十日、大豊町寺内釣井武久の長男として生まれた。大正十四年西豊永村役場書記に任用され、

以来有給、名誉助役を経て昭和十五年には三十二歳で西豊永村長に就任した。

いわゆる能吏として村民に期待され、その間長岡郡青年団長、西豊永農会副会長、農地委員、産業組合理事などを歴任した。

村政を辞してからは、吉野川木材株式会社の専務として敏腕を振るった。昭和三十年大豊村第一回の村議会議員に当選し第二代議長となった。

昭和四十六年一月二日六十二歳で没した。

彼の叔父釣井定利も終戦直後の村長を務めた。

四 東豊永地区

1 秋山楠藏

弘化三年六月二十日、怒田村小林弁藏の長男に生まれた。幼年のとき秋山安藏と加免の養子になった。明治九年地租改正に当たって第五大区三小区の測量を担任、これを完成し、以来殖産興業に意を用い多くの業績を残している。

葉煙草では、その識見をかわれて、同十九年に開催の四国三県連合競進会に葉煙草審査係を拝命している。同年三桎苗数千本を購入、無償で村内に配布した。これが東豊永村の三桎栽植の始まりといわれている。また三桎が静岡県から高知県へ入ったのが明治二十年とされているので、高知県でも東豊永が最初であろう。

明治十九年六月豊永村勸業委員となり、製茶業を奨励し販路拡張に努め、同二十年茶業組合長となり、同年六月第一回高知県勸業諮問会委員を拝命した。同二十三年以来中央茶業組合連合会議員に当選し、数回上京、会議に出席し



秋山楠藏の頌徳碑

高知県農会長伊野部重明撰、農林大臣井野碩哉書の頌徳碑がある。

2 秋田伊三郎

嘉永四年三月七日、伊予国に生まれた。青年のころに豊永郷太平に來住し商業を始めた。酒の醸造技術をもっていたので、明治四十三年有志とはかって、東豊永村及び西豊永村の一部の人と「豊永共同酒類醸造会」を設立した。

彼はその会長に推されて会の経営に心血を傾けたので、密造の弊害も次第に根絶に向かった。このことによって大正六年、時の村長門田繁穂から表彰された。

また産業の発展にも意を用い、大正元年酒造場の一角に製茶伝習所を開き、静岡から技術者池端忠太郎・竹田和三郎の二人を招くなど私財を投じて茶業の改良発展に尽くした。昭和三年待望久しかった一村一組合の産業組合が実現

て新知識を得て村の茶業発展に努めた。また同三十四年には製茶器械の発明に成功するなど、茶業発展に尽くした功績は大きい。

更に養蚕に着目して、明治二十五年自宅に養蚕伝習所を開設して、村の養蚕業の糸口となった。また同二十八年十二月六日より十日まで東豊永村勸業会第一回品評会を開催し、石田英吉高知県知事の臨場を得て褒賞授与式を行った。

大正九年六月十五日、七十五歳で没した。落合大正公園に、昭和十六年十一月三日に建てられた

し初代産業組合長に推されて就任し、組合の信用を高めた。

昭和二十二年二月二日九十八歳の高齢をもって没した。

3 三谷 軌 秀

安政五年一月五日、粟生の三谷岩作と賀也の二男に生まれた。明治十九年和仏法律学校を卒業して、大阪で公証人となった。

明治二十年三大事件の建白のため上京し、林有造・片岡健吉・竹内綱ら高知県人二百三十人とともに保安条令によって二日ないし三日以内に退去を命ぜられ、一年以上三年以上皇居三里以内に立ち入りを禁止された。二十九歳のときである。

のち大阪商業会議所特別議員、同市会議員、同府会議員、同議長を歴任し、衆議院議員に二回当選した。これら地方自治に尽くした功績を認められて、勲四等に叙せられた。

また実業方面では、大阪土地会社社長、電鉄大阪鉄道、大阪電気軌道、大阪合同紡績、同盟紡績等諸会社の重役を歴任した。著書に『市町村制義解』『対比市町村制』などがある。

昭和九年三月八日、七十七歳で没した。

4 三谷 彦右衛門

弘化二年十一月十日、粟生三番屋敷で三谷弥五郎と知玖の長男に生まれた。性格は豪放らしくよく村民に尊敬され、村会議員、郡会議員、東豊永村助役などを歴任した。

明治三十一年郡道下土居ノ落合線の決定の際郡会議員の職にあり、下ノ土居を起点として終点は落合と主張して決

議させ、実地調査のときは、西峰久生野の南小川と小檜曾川の合流点に案内して、ここが郡道終点の落合であると押し通して、久生野まで延長させたことは、豪胆な一面を物語るものである。

この郡道は県道に昇格し、昭和五十六年には国道四百三十九号線に昇格して、大豊町から徳島県東祖谷山村に通ずる幹線道路となっている。

昭和二年十月一日八十三歳で没した。

5 平石男守

元治元年十月十四日、中内四十六番屋敷で平石景弘と以和の長男に生まれた。平石家は代々杜家として続いた由緒ある家柄である。

その祖先は阿波国山城村から移住した佐伯氏という。確認できる家譜によると、寛文年間の人平石庄兵衛から明らかで、中内、川井、大滝、大平、八川、怒田、柚木などの神主を務め、四代平石和泉守正屋のとき江戸幕府公認の神道家元の吉田家から、右神社の神主として裁許状を下賜され、それが十代まで続き和泉守や出羽守、山城正、出雲守などの名称を許された。男守は大正元年右神社の第十二代杜掌となった。

明治三十七年四月東豊永村長となったが、同年九月在任五か月で退任した。同三十八年四月川井小学校の訓導兼校長として子弟の教育に尽くした。

人格高潔にして温和であったので、広く村民に敬慕されながら、昭和十二年十二月三日、七十四歳で没した。弟要も西峰小学校の訓導及び校長を務め、長男正泉もまた教師となり一族あげて村の教育に尽くした。

6 門田繁穂

慶応四年一月二十八日、大平二十九番屋敷で門田実馬と登免の長男に生まれた。幼少のときから学問を好み、長じて産業開発に意を用いた。

特に茶業と養蚕に熱心であり、明治二十二年秋山楠蔵の後を受けて第二代東豊永茶業組合長となり、次いで高知県茶業組合長となった。明治三十四年秋山楠蔵が発明した製茶機械を率先して導入し大平に製茶工場を建築した。この年県下でこの機械を導入した者は十一人であった（「土陽新聞」の報道）。

明治四十一年六月から四か月にわたり、農商務省から三人、民間から福岡、北陸、四国から各一人の計六人で中国の茶業視察が行われたが、彼は四国代表として参加した。

大正五年村長に当選し、同七年四月末まで一年八か月在職して辞任した。

昭和三十三年十一月四日、九十一歳で没した。

7 都築英雄

明治元年七月立野百九十一番地で都築兼次の長男に生まれた。人となりは温厚、しかも尚武の気性に富み、人に接して思いやりのある人柄であった。

陸軍教導団（後の教導学校）に入り卒業と同時に歩兵二等軍曹に任官した。明治二十七年日清戦争に従軍し、同三十年歩兵少尉に任官し、新設された高知歩兵四十四聯隊付となった。同三十五年中尉に昇進と同時に退役となり帰郷した。

明治三十七年日露戦争が勃発し、同年六月応召、満州の野に転戦して歩兵大尉に昇進した。凱旋後、日露戦役殉難者及び戊辰戦以来の殉難兵士の英霊を慰めようと「殉難之碑」建立を企画、提唱して自ら発起人代表となった。

その間明治三十九年三月十日、第三代東豊永郵便局長となり、同四十二年八月十二日まで三か年余りその職にあつ

たが不幸にして病に倒れた。四十二歳であつた。殉難之碑も事業半ばであつたが、在郷軍人東豊永分会が継承して完成した。高さ四^尺、幅二・四^尺、厚さ六十^{センチ}、重さ十数^トの土地の自然石に、陸軍中將従三位勲一等功二級土屋光春の筆で「日露戦役殉難之碑」と大書してあり、裏面には戦死者及び建設者の氏名がある。

英雄の長男不士雄もまた太平洋戦争に海軍機関少佐として従軍し、戦後は東豊永助役を務めた。

8 三谷可司

明治二年七月十六日、三谷藤吉郎と登羅の二男として、西峰二千八百七十一番地で生まれた。三谷可司家は、藩政時代の西峰口道番庄屋三谷家の分家である。

生い立ちの資料を欠いているが、明治三十年六月には二十八歳で助役に当選し、同三十九年には再び有給助役に当選以来四十三年に至る四か年間で就任した。

また明治二十九年西峰正念会（青年会）が結成されると初代会長となり、西峰地方の青年の資質向上に努めた。この会は現在も財団法人として一世紀近く永続発展している。

大正四年十二月三谷亀松村長が事故のため急逝した後を受け、初めて村長に就任し三年三か月在任した。同十二年志和守重村長がわずか六か月で退任したので再び村長に推され一期四か年就任した。

昭和七年三月上村基正村長が、学校統合問題の余波で辞任し、その後を受けて三度村長に推されて就任した。彼が村長に就任したときの状態は、前村長に事故のあったときとか、村の政状不安のときに必ず村長に推されている。これは助役経験が長いこともさることながら、人格識見が村政の上に要請されたものであろう。

同二十七年十二月八日、八十四歳で没した。

9 門田長馬

明治四年四月二十五日、桃原村の中川音次と和佐の二男に生まれた。明治二十年十月三日高原門田鉄馬と左多の養子となる。日清・日露の戦役に従軍して歩兵伍長に任ぜられ、勲七等に叙せられた。

明治三十五年高原で製糸業を始めたが立地的にも適地でなく、同四十年大平土居五十一番地に移り、次第に規模を拡大して、水車を動力源とし、女子工員も三十人になった。

大正三年十一月生糸の高級品が望まれる折から、長岡郡長藤利兵を所長とする製糸伝習所を大平に誘致して工場を開き子女の製糸技術の向上に努めた。また大正公園に建設中の「日露戦役殉難之碑」も発起人代表都築英雄が急逝した後は、在郷軍人幹部としてその完成に中心的役割を果たした。

大正六年ごろから村の養蚕もますます盛んになり、村民の繭の搬出の便利などを考慮し、県道沿いの旧東豊永小学校下のビシャゴに移し、青谷から水をひき、蒸気機関による発電装置を設置し、多条繰糸機を使用して近代式製糸工場とした。女子従業員も七十人余りとなり、全員寄宿舎に収容し教婦によって教養を高め、輸向け高級糸の生産工場として「長北製糸所」の名が高かった。このように東豊永の蚕糸業発展に寄与した功績は大きい。

一方同二年四月には、東豊永村会議員一級議員に当選し、以来数度にわたって当選し、村政の発展に尽くした。昭和二十二年四月八十七歳で没した。

10 小笠原千尋

明治十四年十月十一日、小笠原治太郎と登茂の二男として八川四百六十九番地で生まれた。少年時代から学問を好み、平田篤胤の国学と復古神道に学び、二宮尊徳の報徳思想に傾倒した。

明治十九年に開かれた大社教豊永教会所の第二代所長となったのは三十歳の初めごろであった。当時大社教管長は庶民にとっては雲の上の人であったが、彼は熱心に運動して、時の従三位出雲国造大社教管長千家尊福を大滝教会所に迎えた。

大正二年八川信用販売購買利用組合を設立し自ら組合長となるなど、神職としての学識と公共事業での活躍は、村民から敬慕されたが、大正九年五月十六日、四十歳で没し、人々に惜しまれた。

長男敬之も大社教豊永教会所の所長を務めていたが、昭和十二年八月十九日、臨時召集を受け、予備少尉から大尉に昇進して召集解除となった。同十九年八月再度応召し、同二十年六月十五日、フィリピン国リザール州コヤンパンで部隊の先頭に立って敵陣に突入して戦死した。時に四十二歳、その功績を認められて昇進し陸軍少佐となった。

11 上村基正



上村基正の頌徳碑

明治十六年十月五日、怒田千六百八十六番地で上村福治と左登の長男に生まれた。幼少のころから利発で、長ずるにつれて豪気果斷、世人の信望を集めた。

明治三十八年二十二歳で東豊永村有給助役となり、同三十九年同村収入役に就任し四十二年四月退任した。大正二年四月東豊永村会一級議員に当選して以来、同十三年まで村会及び郡会議員を歴任した。

大正十三年四月村長に就任し、昭和七年退職まで八か年村政を担当して治績を上げた。なかでも落合の護岸工事や、教育面では小学校六校を大滝・西峰・岩原の三校に統合新築したことは特筆すべき事業であった。

昭和九年十月五十二歳で没した。同二十七年五月落合下町出雲大社教会所参道登り口に、内閣総理大臣吉田茂の題字で衆議院議長林譲治の撰になる頌徳碑が建てられた。

12 秋山俊一郎

明治二十五年十月二十二日、大滝五百十九番地三で秋山紋弥と春女の長男に生まれた。大正元年高知県立第一中学校を卒業し、同二年東京水産講習所漁撈科に入学、同四年卒業して、台湾宜蘭庁の技手となった。同五年総督府へ転任し、同九年更に長崎県へ転任した。

昭和三年七月高知県水産課長に迎えられ、のち佐賀県農水産課長を経て、長崎県水産試験場長を歴任した。

昭和二十五年六月、長崎県から参議院議員に当選し、同三十一年にも再選され、二期十二年間国会議員として、農林、水産両委員長及び外務政務次官を歴任した。

そのほか大洋漁業常務取締役、漁船保険中央会長など五十年間農水産業一途に捧げた功績により、昭和四十年四月二十九日、勲二等に叙せられ、瑞宝章を受けた。昭和四十七年十二月三日、八十歳で没した。

13 上村猛男

明治二十四年一月十五日怒田千六百八十六番地の上村福治と左登の二男に生まれた。長じて上村久太郎と益衛の養子となった。

村会議員、産業組合長、森林組合長を歴任し、昭和二十二年四月一日、村長に当選、同二十六年三月三十一日、満期

退職した。昭和二十六年県議会議員に当選して活躍中、同二十八年一月六日、任期半ばにして急逝した。六十三歳。

14 三谷 亀松

明治三年十二月十日、川戸十八番屋敷、西村信祭と菊の二男に生まれた。明治三十二年八月十六日、西峰二千二百二十四番地三谷輝映と多真の養子となった。

明治二十五年三月から同二十六年五月まで庵谷簡易小学校授業生心得、寺内尋常小学校准訓導心得を歴任し子弟の教育に努めた。その後明治二十六年十二月一日から同二十九年九月十日まで高知県巡査を務めた。

明治二十八年二月上京して、東京法学院に入学、同二十九年十一月和仏法律学校に転校して第二年に編入し、同三十一年七月卒業した。同三十五年十二月から、同四十年四月に至る間に東豊永村会議員及び名誉助役を務めて村政の発展に尽力した。

明治四十年十月五日、郡会議員に当選し、四年間在職した。同四十二年五月五日東豊永村名誉村長に当選し、村農会長を兼務して、大正四年五月まで六年間勤めた。

また明治三十六年八月西峰正念会会長に推されて就任以来、青年補習教育に尽くし、同四十一年二月県知事から補習教育功労者として表彰され、同四十四年村教育会長となった。更に自家に三農園と称する研究農場を設け一般農事、果樹園芸、養蚕、養鶏等村民に率先してその範を示し、農事改良に努めた。

果樹園芸に例をとると、同三十六年当時豊永地方では最初であらうと思われるリンゴの栽培を始めている。同三十六年に植え始め四十二年までに二百本を植えている。しかも年々新品種の植え付けを行って試験研究に取り組んでおり、農村における指導者であった。大正四年十二月十九日、四十七歳で没した。

郷土史家西村自登は、彼の甥である。

15 志和久寿満

慶応二年筏木の志和幸之進と岩子の長男に生まれた。志和家は山内氏に仕えた士分の家柄だが曾祖父運平のとき初めて筏木に移り、代々医を業とした。

父幸之進は二子を残し、若くして他界したが、母岩子は賢夫人の名が高かった人で、困苦に耐えて久寿満を学究の道に進め医者とすることができた。実弟守重も医学の道に進み、明治四十三年熊本医専を卒業し、筏木で開業した。更に養子文平も熊本医科大学を卒業し医者となるなど、一家をあげて医師となり、村の医療に尽くした功績は大きい。特に久寿満は文字どおり「医は仁術」を実践した人で、恬淡無欲の人柄で、病家に貧困の人があれば薬価にも温情をもって当たり、火傷の名医の名が高く、患者の家が遠くても気やすく馬で往診するなど住民の信頼と尊敬を集めた。

昭和二年筏木小笠原寅之助の發起で、まだ生存中であったがその徳をたたえ、筏木町道三差路の上段に頌徳碑が建立され、同年十月二十七日、除幕式が行われた。熊本医科大学長山崎博士の題字に、碑文は海軍中将武田秀雄の撰並びに書である。昭和十五年七月十五日没した。七十五歳。

16 三谷隆俊

明治十七年七月三十日、川井四百六十四番地の三谷文弥と加根の長男に生まれた。明治三十九年高知県巡査を拝命したが、家の都合で退職し、村の書記、助役を歴任した。

大正八年再び警察官として朝鮮総督府巡査を拝命、同十三年退職して帰省した。帰省と同時に東豊永村名誉助役に就任し、上村基正村長の女房役としてよくこれを補佐した。

昭和八年村長に就任し敏腕を振るった。同九年十月には、東豊永村経済更生計画を樹立し、五か年計画で民心の作興、生活様式の改善、農業経営の改善、産業組合の拡充、天然資源の開発の五点の要項に基づいて更生の実を上げた。村長退職後は、東豊永産業組合長として日中戦争下の組合の責務を果たした。

昭和十六年四月二十三日五十八歳で没した。

17 吉川 潔臣

明治二十二年十二月二十九日、岩原吉川梅彌と末津の長男に生まれた。広島教員養成所を卒業し、十七年間教職を務めた。

昭和三年十二月前東豊永村収入役中川正深が急死のため請われて収入役となった。同十二年村長に就任し、二期八年間にわたって戦時下の困難な時代の村政を担当した。

戦時下の村長は、産業組合長をも兼務することとなり、昭和十八年十二月八日、農業会に改組されるまで組合長として、改組後は初代農業会長として二十一年三月三十一日まで要職を歴任した。

昭和四十四年十一月二日、八十一歳で没した。

18 三谷 泉水

明治二十七年十二月十九日、粟生百二十二番地の三谷傳次郎と伊志の長男に生まれた。父傳次郎は、豊永郷大庄屋山本実蔵の孫である。幼少のころから吉田秀光・上村一徳について剣術を学んだ。

天稟^{びん}の才に恵まれて上達は早く、小学生のころから中学生に伍して県下の大会に出場するなど頭角を現した。大正三年師範学校四年生の時も京都武徳殿における日本武道大会に選手として出場して、大学生を相手に勝利を収め高知

師範の声価を高めた。

大正四年高知県師範学校本科を卒業し、同年四月教師として最初の赴任校が母校東豊永尋常高等小学校であった。その後、高知高等小学校・怒田尋常小学校・西豊永尋常高等小学校などの訓導として十一年間勤め、大正十五年四月三十二歳で早くも怒田尋常小学校の校長となった。

怒田校から西峰尋常小学校・後免野田組合小学校・大田口小学校・本山国民学校兼同青年学校などの校長職を十九年間務めた。昭和二十年三月本山国民学校長を最後に退職したが、教職にあること三十年、その間名校長として数多くの業績を残した。

また昭和二十一年四月一日、東豊永村農業会第二代会長に就任し戦後の混乱期に手腕を発揮した。同二十七年五月には教育委員に当選し、東豊永村初代教育委員長に就任した。

昭和三十年三月三十一日、嶺東四か村が合併して大豊村が誕生し、同年五月村長選挙が行われ、六名の立候補者の中から当選を果たし初代村長に就任した。その後三十四年、三十八年の改選期にはいずれも無投票で当選し、九年七か月にわたり合併初期の村政の基礎を確立した。

昭和三十九年十一月十一日西谷昇県議死亡のため補欠選挙に立候補して当選し、高知県議会議員となった。四十二年の選挙にも再選され、厚生常任委員長を務め、また早明浦ダム建設については県議会で活躍して嶺北地域の開発に尽くした。

昭和四十二年十一月以上の功績により勲六等に叙せられ、単光旭日章を授与された。五十六年四月役場庁舎前に長年の功績を顕彰して胸像と頌徳碑を建立した。昭和五十七年十二月九日、八十九歳で没した。



三谷泉水の胸像と頌徳碑

19 高木定盛

明治三十三年四月八日、西峰千二百十三番地で高木楠馬の長男に生まれた。昭和三年から同二十年まで、東豊永産業組合及び農業会の常務理事、専務理事などを歴任した。

昭和二十六年四月一日、東豊永村長に当選し、同三十年三月三十一日まで就任した。その間嶺東四か村が合併して大豊村が発足するまでは推進役として積極的に活躍した。

昭和二十六年七月二十八日、東豊永農業協同組合長をも兼務することになり、村長退職後も引き続き四十二年二月まで就任した。昭和五十八年三月五日八十四歳で没した。

20 氏原尊法

明治四十年七月十日、西峰百五十一番地で氏原安市と志計於の長男に生まれた。

高等小学校卒業後東豊永役場の吏員となった。その後東京警察講習所を卒業し、警察官として赤岡警察署長、県警の保安課長・防犯統計課長・刑事部長・総務部長などのほか高知市警察長、地方警務官、高知警察署長などを歴任し、最後は南国博覧会事務局長を務めた。昭和三十三年一月二十九日、五十歳で没した。

高知弁護士会長氏原瑞穂は彼の長男である。